

## 日本留学フェア参加報告

荒武 祐宏  
(研究国際部留学生課課長代理)

### 1 平成19年度日本留学フェア(国際教育展:マレーシア)について

留学生センター及び留学生課では、国際交流の一環として、平成19年12月8日(土)、9日(日)に、マレーシアの首都クアラルンプールのプトラワールドトレードセンター(PWTC)で開催された、平成19(2007)年度日本留学フェア(国際教育展:マレーシア)に参加し、本学の広報、学生の勧誘を行った。

この留学フェアは、マレーシアの学生が日本留学を志し、かつ留学希望に合った大学等を選択し、実りある留学を達成できるようにするためのマレーシア政府のフェアに、日本からは独立行政法人日本学生支援機構とマレーシア元留日学生協会が中心となり参加大学を募り、在マレーシア日本国大使館、マレーシア東方政策日本留学同窓会(ALEPS: Alumni Look-East Policy Society)の後援を得て出展するもので、留学希望者及び進学指導者等を対象に、日本の高等教育に関する情報及び個々の大学の教育、研究上の特色等に関する最新の確かな情報を提供し、日本への留学の促進を図るものである。

この国際教育展は、マレーシア政府が実施するもので、オーストラリア、イギリスに並んで、日本として参加する形で行われ、その中に鹿児島大学もブースを設ける形で参加した。

このマレーシア政府国際教育展は、今回で19回目を数え、開催セレモニーではマレーシア政府教育省の Hon Choon Kim (韓春景) 副大臣のテープカットで開始された。

Hon Choon Kim (韓春景) 副大臣は、会場視察に際して日本ブース群のなかでも鹿児島大学のブースで足を止めて下さり、畝田谷准教授から留学生受入等に係る鹿児島大学の姿勢等についての説明を聞いてくださった。

また、PWCT は、規模は小さいものの日本の幕張メッセにあたるようなイベント会場になるもので、国際教育展期間中も他のフロアでは、商業的なイベントが多数開催されており、クアラルンプールの中でも多くの家族連れが集まる場所のひとつであった。

フェアの対象は、高校生、大学生等留学希望者、大学等教育機関の国際交流担当者等となっているが、PWTC の性格もあいまって、学生に限らずさまざまな人が集まって来ていた。また、2日目は日曜日であることもあり家族連れが多く、親からの質問も多かった。

高校生の子供だけでなく、家族全員でブースを訪れ、高校生本人だけでなく両親も小学生らしい子供も一緒になって説明に聞き入る様子を見ながら、マレーシアの教育への関心の高さ、国外留学への関心の高さが感じられた。

### 2 説明の内容、様子について

フェア中は、ブースの中ではなく通路に立って、本学のブースに少しでも興味を示してくれ

る学生には積極的に声をかけた。

来場者は何を勉強したいかの目的がはっきりしており、「学部か大学院か」、「学部、専門はどこを考えているか」とのこちらからの質問に対し、はっきりとした答えが返ってくるのを聞きながら、日本の高校生はここまではっきり目的を持っているだろうかなどと考えていた。

目指す学部・研究科が本学にあることが確認できたら、腰掛けてもらい、具体的な話をを行った。

質問の内容は当然ながら、まず教育の内容であった。これについては、英文概要で大まかな内容を説明し、各学部・研究科の概要で詳細を説明するようにした。ただ、各学部・研究科の概要については、必要部数の予想も立たなかったこと、日本語であったことから持参数が少なく、あまり手渡すことができず、また、手渡しても結局英文概要に興味を示していた。

今回意外だったのは、学生が求めてくる学部の内容であった。

本学ではマレーシアからの留学生は工学部と理工学研究科にしか来ておらず、おそらく質問もその学部に限られると予想していた。確かに、工学系が多かったものの、それ以外にも農・水系はもちろん、医歯系も多く、さらに文系である教育・経済関係の部局に対する質問が多かったことは意外であった。

次が経済的な質問となる。まず、授業料をはじめとした各種料金の質問があった。これについては、日本文と英文の一覧を持参していたが、現地の通貨(RM・リンギット)に換算していなかったため、(1RM = 約30円)各金額を30で割ったものを、英文の一覧に書き込んだものをコピーして説明をした。

生活費については、学生も私たちも話をしながら、両国ともそれほど違いは無いという感触をお互い持てた。

ただ、宿舎についての質問が多かった中、宿舎の部屋数が限られており自分で部屋を探す必要があることを説明しなければならないことについては、気が重かった。一応、これについては意外とすぐに納得してくれた。

### 3 渡日前入学許可の制度について

そして、受験方法であるが、これについては独立行政法人日本学生支援機構が毎年2回各国で実施している「日本留学試験」が浸透しており、その中で必要な科目や言語(日本語と英語が選択できること)等の説明はスムーズに行えた。

その上で、面接が必要であり、どうしても日本へ来てもらうことが必要であることを説明したが、中には少々落胆して、日本に行かなくても試験は受けられないのかという質問をする学生もいた。これについては、現在文部科学省と独立行政法人日本学生支援機構が、日本留学試験を利用し日本に来なくても試験を受けられる、渡日前入学許可の制度の導入を進めており、本学についてもこの制度を採った場合それを利用する可能性がある学生が結構いたことは、収穫であったように思う。今後、予算の状況を見て、遠隔会議システム等を利用した面接による渡日前入学許可制度の導入を検討する際は、マレーシアも候補にできると思われる。

#### 4 職員の連絡先について

入学方法の説明をする際、必ずといっていいほど聞かれるのが、連絡先である。

一般の学部の入試については、入試課か留学生課のアドレスや留学生センターのホームページの URL 等を教えればいいが、大学院の場合や研究生、国費留学の手続きについては、教員と直接連絡を取りたがるが、個人情報関係で教えられない点が問題であると感じた。

一応、専門に合う教員を探すためには、鹿児島大学のホームページから、研究者総覧で検索してもらうようお願いした。ただ、研究者総覧にはメールアドレスはあるものの、その前提として日本語であり、かなり敷居が高いことが予想される。

これについては、他の入試に関するホームページも同様に、大学院の場合は各部局のホームページをみてもらうこととなるが、いずれも日本語であることが多いことは紹介をしつつも気が引ける点であった。

しかし、当然英語でのホームページの充実が望まれるところであるが、日本の場合そう簡単に英文に直せないところが問題点である。

毎年整備する学生募集要項を、ホームページにこまめに反映させることは、学生確保に不可欠となってきているように思う。

#### 5 日本語学校等との連携について

このような説明をしつつ、最後には、日本語ができない学生については、この段階で、まず日本語から勉強をするように付け加えた。

これについては、鹿児島大学の中に日本語を教える学校は無いのかという質問もけっこうあったが、留学生センターは入学した学生への日本語教育が基本であることを説明し、同時にブースを出している日本語専門学校のブースを訪れるように紹介した。

今回のフェアには日本語専門学校も多くブースを出しており、その中で、新宿日本語学校の方と話をする機会があった。この新宿にある学校では、現在300名程度の生徒を持っており、ここで開催される進学フェアには近隣や地方の国立大学からも説明に来るとのことであった。確かに留学生を確保するには外国まで足を運ぶよりも、このような日本語学校で説明をする方が、学生の目的もはっきりしており、また当然日本語の学習も進んでいることもあり、いくつかの信頼できる専門学校と提携し、身元の確かな語学力のある学生を推薦してもらう方が、留学生確保の近道であるように思う。

また、帝京大学ではマレーシアに附属の日本語学校として「帝京マレーシア日本語学院 (IBT)」を持っている。ここの学生も多く鹿児島大学のブースに来てくれたが、日本語の上手な学生が多く、派遣した職員のうち英語の苦手な職員でも充分説明が可能であった。

IBT の学生は、特に帝京大学に行くために日本語を勉強しているわけではなく、高校卒業の際の修了証明試験であるSPMを受験し、その点数により留学できる国が決まりそれに基づきマラヤ大学や IBT などで留学のための予備教育として日本語を勉強している。この学校の場

合、マレーシア国内にいて日本語が勉強できるわけで、このような学校と提携することは、本学にとっても優秀な学生を確保しやすいというメリットが大きく、このような学校の学生を渡日前留学許可制度のための学生もこのような学校と提携すれば確保しやすいと思われる。

#### 6 マレーシアの教育制度について

ところで、この SPM 試験とは、マレーシア教育修了証明試験 (Sijil Pelajaran Malaysia) の略だそうである。マレーシアの教育制度は、多言語という国情ともあいまって複雑であるが、簡単に言うと、初等教育、中等教育(高校等)の終了時に全国一斉の修了証明試験を受験する義務があるが、中等教育の修了証明試験が SPM だそうである。

中等教育終了後、大学準備教育課程に進学するが、そこでの分類がこの SPM の結果により行われ、優秀なものは日本等への政府派遣により留学するプログラムへ進学できるということであった。そのような学生が、IBT などで留学の予備教育として日本語教育を受けるそうである。

さて、このようなマレーシアの情報については通訳をしてくれたシュクリさんから得た情報である。

シュクリさんは、立命館大学を卒業しており、現在マレーシア東方政策日本留学同窓会 (ALEPS: Alumni Look-East Policy Society) に所属しておりその関連で通訳として参加していた。この ALFPS は、日本留学同窓会であるが、その活動内容は今から留学生として派遣する学生の面倒も見ているようで、彼の顔を見て本学のブースによってくれる学生も多数いた。

彼から、マレーシアの留学のための制度を聞き、彼の活動内容を聞くに付け、マレーシア政府の教育や派遣留学に対する制度が大変よく整備されていることが伺えたが、これは国営石油会社を持つマレーシア政府の裕福さがなせるものである気がする。その国営石油会社であるペトロナスも、政府派遣とは別の独自の奨学金制度を持っており、こちらは政府派遣と違い卒業後はペトロナスへの就職が義務付けられているようで、卒業後の進路が自由である政府派遣との違いが明らかである。

#### 7 通訳の役割の重要性について

ところで、通訳と言っても、ただ単に私たち職員がしゃべることを現地語または英語に訳すだけではない。むしろ、彼に鹿兒島大学の基本的なことを説明しておく、彼が自分で判断し説明してくれる。職員はそれぞれ別のグループの説明を担当し、ときどき分からないことについて彼から質問されるのでそれに答える形であった。

そうしなければ、とても対応しきれないほどの人数であり、また、彼を訪ねてきてくれる学生さんも多いことは本学にとっても大変メリットであった。

#### 8 留学希望者からの質問例について

以上が、ブースでの基本的な説明の流れであるが、中には特殊な質問もあった。

ひとつは、マレーシアの教育制度の特殊性で、高校が2年であること、高校の際旧宗主国であるイギリスに留学した場合、高校を1年省略できる(いわゆる飛び級)のだそうであるが、日本の大学の受験資格に影響は無いのかという質問であった。ちなみに、今年マレーシアは、イギリスからの独立50周年にあたるそうで、マレーシア政府観光局ではヴィジットマレーシアというキャンペーンを行っていた。

もうひとつは、母親が鹿児島の人で、本人は日本とマレーシアの2つの国籍を持っており、生まれながらの言語はマンダリン語(中国語のひとつ(北京官話)で、中国系のマレーシア人が使っている)であるが、入学試験は留学生と同じ扱いをしてくれるのかという質問であった。

いずれも、即答できる問題ではなく、その質問を受けた段階では日本との通信手段が確保できていなかったため、名刺を渡し詳細をメールで送ってくれるようお願いした。後ほど入試課と相談する予定である。

#### 9 日本との携帯電話による通信について

日本との通信手段について、少し触れる必要があると思う。

マレーシア渡航に際し、日本との通信手段について、2つの方法を考えた。

ひとつは、携帯電話であり、もうひとつは持参したノートパソコンによるインターネットである。

海外に出張する職員との通信手段の確保については、危機管理上重要であることから、今回留学生課の携帯電話を買いかえるに際し、海外での通話も可能な機種を選択し、これで連絡を取れるものと考えていた。

実際、クアラルンプール空港に到着して電源を入れた際は、メールを数件受信した。

ところが、タクシーで1時間ほど移動したクアラルンプール市内のホテルでは圏外の状態になり、通話もメールもできなくなっていた。

翌日、市内の携帯電話販売会社へ持っていった際、国内で使用するカードを買っていないからだといわれ、購入したカードを入れてもらう段階で、この携帯電話は使えないといわれ、そのカードを返却したところ、通話ができる状態となった。つまり、電源の切入をしたところ使用できた。

しかし、この携帯電話で卒業した留学生であるノルシダさんと連絡が取れ、ノルシダさんの案内で近郊の首都移転先であるプトラジャヤへ行った後ホテルに戻ると、また圏外になっていた。これは、電源の切入で再度使用できるようになったが、ペナンで問題無く利用したあと、クアラルンプール空港に戻ると、圏外となり、これは電源を切入しても最後まで利用できなかった。

このように、海外利用可能の携帯電話であっても、必ずしも信頼できるわけではない。

## 10 日本とのインターネットによる通信について

次に、このようなことも想定して、持参のノートパソコンでインターネットを利用することも考えた。日本の場合、既にホテルなどでは設定せずにインターネットを無料で利用することができるようになっていたため、国外でも可能ではないかと考えたためである。

これについて、クアラルンプール市内で宿泊したホテルには、室内にパソコンが置いてあった。これを使っていいか尋ねたところ、無料であるが、持参のパソコンを使う場合は有料で、1時間500円程度が必要とのことであった。ペナン市内で宿泊したホテルにはインターネット端子があり、これも有料であった。利用料の支払いはおそらく自己負担しなく、何よりも、当然ながらこれらのことを聞くのに英語が必要であり、英語に自信が無い場合は利用が難しいことを、通信手段の確保の際には念頭に入れておいたほうが良いと思われる。

蛇足ながら、これらの電気機器を持参する場合、電源の確保も考えておく必要がある。

変電器とプラグは持参したが、確認して持参したはずのプラグの規格が合わず、少々困惑した。一応確保はできたものの、今後の渡航については通信手段の確保と合わせて留意しておく点であると思われる。

## 11 マレーシアの国内情勢について

留学を考えると、その国の国内情勢を考える必要があるが、マレーシアは国営石油会社からの収入も多いことから、国自体比較的豊かに思われる。

物価も日本の物価に近く、個人収入もある程度あるように思えた。市内を走る自動車は、10年以上前の日本車も走っていたが、現在の日本車に加え、ドイツの高級車も数多く見かけた。元留学生のノルシダさんの話では、乗用車の価格は日本車の場合、日本国内で購入する2倍程度かかるということであったが、郊外の住宅地でも普通に見かけられた。

このような経済状況からすると、政府派遣ではなくとも、私費留学も充分可能であるとの印象であった。

治安状況についても非常に安定しているように思えた。クアラルンプール市内では、深夜0時でもペトロナス・ツインタワーのような市内中心部でも普通に観光客が歩いており、その近くにあるディスコでは、髪をスカーフで覆った女性が歩く傍らを、短パン姿の女性がひとりで歩く光景が普通に見られた。当然、一部注意が必要な区域もあるようだが、東京都内の新宿の方がはるかに危険ではないかという印象であった。

宗教は、約半数がイスラム教で、国立のモスクを持つほどの国である。そのほか中国系住民は仏教、インド系住民はヒンズー教ということであった。

マレー系住民の気質は穏やかで、マレー系が多い首都クアラルンプールでは、深夜になっても交通量が非常に多いにも関わらず、クラクションひとつ聞こえなかった。他方、中国系住民の多いペナンでは、市内はクラクションが鳴りっぱなしであり、両都市の性格の違いに驚かされたものの、少なくともテロの脅威という雰囲気はどこにもなかった。

伝染病については、デング熱を媒介する蚊の対策が必要とのことであったが、時期的なも

のか山間部の果樹園でも蚊はいなかった。

言語は、マレー語、中国語などが入り混じっているが、どこへ行っても英語が通じるようであった。元留学生の友人という人の話によると、英語は幼稚園で習い始め、小学校では理科と算数は英語で授業であるそうである。彼に、テレビでやっている CNN ニュースは理解できるのかときいたところ、完全にではないがわかるとのことであった。確かに、マレーシアからの留学生は、日本語に習熟しない段階では英語で話そうとしている。

このような国情からか、国外への留学も盛んな様であった。それが、教育に対する関心の高さや、マレーシア政府の海外派遣奨学金制度に見られる海外派遣制度の充実とあいまって、国外への留学熱は高く、それがこのフェアへの参加者の多さに結びついているようである。

それを物語るように、今回の参加者は、日本ブース来場者だけでも1961人であり、本学のブースへの来訪者も200名を越す人数であった。名簿への記載者は約70名であったが、来訪者が多く次々に来る来訪者を待たせているためグループ全員に名前を書いてもらうことができず、代表者だけが書くことも多かったことから、名簿の約3倍は来訪者があったと思われる。

事実、来訪者へ配るために持参した約100枚のペーパーホルダーは、1日目の開始後数時間で底をついてしまう状況であった。持参した資料も同じ状態で、1日目後半からは、中心となる資料をコピーして配布をしなければいけない状況であった。

## 12 マレーシアでの留学生フォローアップ事業について

ところで、今回留学フェアに参加する国にマレーシアを選んだ理由はもうひとつあった。

留学生のフォローアップ事業の一環としてマレーシアの元鹿兒島大学留学生と会いマレーシアにおける元鹿兒島大学留学生の輪を作れないかを探ることがそのねらいである。

留学生の場合、学務情報システムにある本国の連絡先等については卒業と同時に削除されるため、帰国後の連絡は、指導教員に個人的に送られてくる年賀状等しかなく、連絡は非常に困難な状況にある。

その点、マレーシアは政府派遣の留学生が多いため、帰国後の同窓会組織が充実しており、前述のマレーシア東方政策日本留学同窓会(ALEPS: Alumni Look-East Policy Society)もそのひとつである。この同窓会は、1982年から予備教育が開始され、1984年に第1期生を送り出して以来、約3,600人送り出した政府派遣留学生の同窓会で、文化交流、先輩の体験談紹介などの事業を行っており、卒業後の動向も把握している。

今回は、渡航前に現在作成中の元留学生の名簿にあるアドレスにメールを送ったほか、在日マレーシア大使館にも連絡を取り情報を提供してもらうなどを試みた。

このようにして元留学生にコンタクトを試みたところ、ようやく数名の元留学生と連絡がとれ、クアラルンプールで1名、ペナンで3名の元留学生と会うことが実現した。

両都市とも、渡航後に連絡の手段と考えていた携帯電話の不調のため、一時は会うことをあきらめかけたが、すれ違い寸前で会うことができたのは、幸運であった。

クアラルンプールで会ったノルシダさんに、ペナンでは、カイリルさん、ニックさん、ファイサ

ルさんと会うことができ、特にカイリルさんは友人が多く、連絡を取っている本学元留学生も何人かいるということであった。

いずれも、本学の国際戦略本部で実施しているアンケート用紙を渡し協力をお願いするとともに、元留学生の輪を作るためのデータベースを作っているの、知り合い等の連絡先を連絡してもらおうようにお願いした。

また、元留学生の卒業後の状況も聞くことができた。就職後の状況については、必ずしも満足しているわけではなく、さらに上の学位を目指すため、再度鹿児島へ行きたいという元留学生もあり、そういう人達のために何ができるかを考える必要があることを感じた。

実際、留学生フォローアップ事業については、元留学生に何を上げて上げられるかを具体的に示していく必要があると思われる。

元留学生が本学に再び連絡を取りたくなった際、もし教員等と連絡が取れなくなっていた場合でもその窓口となれるようにすることもひとつあると思う。

国際戦略本部では、元留学生向けのメールマガジンを開始しており、本学の状況を報告することからはじめ、独立行政法人日本学生支援機構が行っている研究指導事業、短期研究制度などを紹介していく必要もあると思う。

少なくとも、本学が元留学生に何かを求めるようであれば、とても彼らから協力を得ることはできないように思われる。当然仕事を持ち忙しい毎日の中で、さらに余計な仕事を押し付けられては迷惑という感じは、今回会った元留学生からも一瞬読み取れた。これについては、本学が彼らに何かをしてあげたいのだという、本来の趣旨を説明することで納得をしてもらえたように思う。

いずれの元留学生も、鹿児島大学関係者と会えることを大変歓迎してくれ、家族で会いに来てくれたノルシダさんは、ご主人の車で深夜までクアラルンプルと首都移転先のプトラジャヤを案内してくれ、前に書いたマレーシアの国情のことや、現在ノルシダさんが教員を勤めるマレーシアプトラ大学(University Putra Malaysia (UPM))と本学の協定の話などをすることができた。

ペナンでは、カイリルさんが地元の地理に詳しい友人を連れて、わざわざ2人とも翌日午後休暇をとってペナン島周辺を案内してくれた。

留学生センターが、いかに日頃からきめの細かい指導を行ってきたかを感じるとともに、マレーシアの人の情の厚さが感じられた。

### 13 他国の留学生確保の活動について

最後に、他国の留学生確保の活動について触れたい。

今回のマレーシア政府の国際教育展には、日本だけではなく、イギリス、オーストラリアなどの大学が、ブースを出していたがその積極さはとうてい日本と比べられるものではないほど積極的であった。ブースも広く飾り付けにも予算を使い、アルバイトを多く雇いそろいの服で手にはプレゼントを握り次々に学生に声をかけブースに引っ張り込んでいた。



日本ではどうしても国策であるODAの延長という感じが否めないが、こういう国々では留学生の受入はビジネスであり、金をかけてでも留学生を確保したいという姿勢が如実に感じられた。

このような国々に対抗するためにも、留学生確保の必要性を再確認する必要があると思う。

確かに、留学生は日本人学生の数倍手間がかかり、言語の問題とあいまってどこの部局の事務でも厄介者扱いされる傾向があるのも事実である。

しかし、留学生の受入は、少子化時代の定員確保はもちろん、国内にこもりがちな日本人学生に国際社会への刺激を与える最も手軽かつ近道である。留学生の確保は、本学が憲章で掲げるところの国際交流の推進には欠くことのできない事業であることを認識し、今後も積極的に留学生確保の活動を続けるべきであると思われる。

今回1回マレーシアへ行っただけで何人の留学生を確保できたかといわれると難しい面もあるが、少なくともこのような留学生確保の活動を継続して行うことは、本学が留学生確保に積極的である姿勢を示すものであり、今後もこのような活動を続けていく必要があるように思われる。

それと同時にこのような企画に留学生課職員だけでなく、部局の留学生担当職員を派遣することも考えていいように思う。

各部局の教育内容に精通している職員を派遣する必要があることもひとつある。

大学の国際化は学生、教員のみの問題ではない。職員の国際化を考える場合、どうしても英語の問題に直面する。

採用の段階で英語のできる職員を積極的に採用することはまず必要なことである。

さらに、採用後に英語の勉強を始めたような職員も多いはずであり、そのような職員に実践の場を与えることも必要である。国内ではどうしても臆しがちでも、必要に駆られて英語を使わざるを得ない状況に置かれるのも経験であると思われ、このような事業に、部局の留学生担当職員を派遣することも考えていいのではなかろうか。